



目まぐるしく変わる冬の天候の中でこんなにすごい日没に出会うこともある。実は月没にも出遇えるのだが、これは仲々タイミングが難しい。



穏やかに明けた今年の元朝であったが、その気になっているなよとばかり、小正月14日の荒れ方はものすごかった。突堤の波しぶき。



大晦日は風雨に暮れたのであるが、除夜の鐘を撞く頃はすっかり静かな夜となったのだが、二年参りの人の出足は今までになく閑散。

穏やかに 元朝明けて



月刊 第570号

吹き荒れていた大晦日の午後からの天気が除夜の鐘を撞き始める十一時半過ぎにはすっかり風もおさまり気温もコートが要らない程。この分だといつもより大勢の参加が期待できそ

うで他の寺ではどんな様子だったのだろうか。撞き終ってから雑談の中であの夕方の荒れ模様の中では今晚はこの荒れだから止めとこうと予定変更を決定、戸締りのよくなった近頃の家ではテレビをつけていれば外の天気の変化などがつかずそれで出足が停ったのではと言う結論となった。

明ければ晴天、弥彦神社は大変な混雑で交通渋滞だけでなくかつての石段での崩落惨事もあったことから石段での参拝規制もされる程の混雑振り。国上山や海岸への人の流れも相当なもので、減多にない年頭の一日をのんびりよいお天気の中で過ごした人が多かったことと思われま

す。復活した元旦マラソンはまだ宣伝不足もあって参加人数こそ不足気味ではあるものの、若者の参加者が目立ち、体育協会、町陸協の努力が評価されると共に今後の取組みへの創意工夫を期待を込めて望みたい。

厳しい冬の天候の中では今年のように晴天に恵まれるのは珍しいこと。漁師は雪の日をお天気に勘定するのだが、雪が降る時は風が止ることが多いので出漁できることからであろう。

夜明けの遅いこの季節は又月の沈む姿を見ることが出来る季節でもある。月光を浴びて松ヶ枝はいよいよ黒々として震える程に冴えわたった空に月は皓々と

して海へ傾くに從ってその輝きを海に注ぎ込みながら落ちてゆくのであるが残念なことに沈む頃にはほとんど雲に邪魔されてしまいうので、条件に廻り合う運と辛棒が要求されるようだ。

十三日から大荒れで小正月と云うのに町の魚屋は品物が底を空っぽになっている。これが魚の町の現実でもある。天気が回復すればタコ、タラ、ハタハタ等冬場の美味しい地物が店先に並ぶ。どれ位の家が小正月ややぶ入りなどの行事を守っているか、十五日の小豆粥も心元ない限りで何とか地域文化として維持してゆきたいものである。

紙面の都合で会計報告は二月号に掲載させて頂きます。

少年時代のこと

大町 松田 圭司

その頃、小学校就学前の子供達は「はえの子」と呼ばれ、一人前に扱われることはなく、例えば上級生と遊んで貰う時等は鬼ごっこでつかまっても鬼にされなくてすむわけです。

大町では少年団があり、毎日曜集合ラッパの合図で三番公園のお稲荷様に集ることになっていました。尋常高等科二年生が最上級生で、団長・副団長など役割が決っていて規律や遊びについて自主的に決めていました。例えば「おやつ等歩きながら食べる事の禁止」「午後からは泳ぎに行く」など。当時少年達の



150年近くも前に爆沈した外輪船のシャフトも、今は全く別の姿で立ちつくす。ゴツゴツとした鉄の肌に明治の気骨がみなぎる。



白山神社へ老若男女が参拝。お互に新年の挨拶も交される。心新たに気嫌よくこの一年を過ごしたいものです。



お寺でも除夜の鐘を撞き終った人達が屠蘇を頂き新年の挨拶を交わし合う。

遊びは「見つけたドン」「鉢巻取り」（戦艦、駆逐艦、水雷艇、潜水艦等の鉢巻をして勝てる相手にタッチする遊び）など戦時の濃いものから「西洋二番」（手切り鬼に似た遊び）などジャレタ名の遊びまで、外で日が暮れて夫々の家から子供の名を呼ぶ声がかかるまで跳ね廻っていました。

小学校に入ると夏休み等もっぱら海が遊び場でガキ大将の聲がかかれば泳げる泳げないは構いなしで、一番瀬二番瀬と半分溺れかけたような犬かきで必死でついて行き、少し泳げるようになると少しでも早く泳げるように横泳ぎでした。

当時の海岸の状況について云

新春雑感

さとう・のぶひと
みなさん明けましておめでと
うございます。今年もよろしく
お願いします。

えは、大正十五年に分水からの
流砂防止のため能登屋小路裏の
突堤は完成したものの横瀬との
間十米程は通船の為開けられて
いて港内には上田町海岸の一部
を除いてほとんど砂地はなく、
又一方王潤瀬の突堤はさくらや
食堂の裏から沖へ向って張り出
しており、その先端と横瀬の先
端とに戊辰の役で港内で爆沈し
た幕府軍の外輪運送船動丸の
シャフトが寺泊の港のシンボル
のように立っていた。(次号へ)

寺泊は越後でも元々少雪地帯
です。加えてここ何年も暖冬が
続き、02年十二月のような例外
もありましたが、今年もまた雪の
ないお正月でした。しかし時折
り見舞われる寒波は、紛れもな
く真冬のもので、海は荒れ、
粉雪まじりの冷え切った風が街
並に襲いかかります。

杉や松の緑が寒々しさ誘い、
そろそろ落葉樹の新緑が恋しい
時節となりました。庭木の梅が
蕾をふくらませ、開花を待って
います。でも大寒が過ぎるまで
油断はできません。

この「大寒まで油断できない」という表現の中に、雪国特有の「構え」が含まれているように思います。「冬」は闘うべき季節の謂であると。何と闘うのか？

もちろん、寒さと雪です。冬というと思わず身構えてしまふ。そのことは、雪国に生を享けた者の季節の感覚を基礎付けているように思われます。学生の頃、九州宮崎県出身の友人がいました。驚かされたのは、冬に対する恐れを全く持っていないことでした。その上、四季に対する感覚が極めて希薄で、一年中同じような薄着をしている男でした。

この友人が特別にそうだったのかも知れませんが、無理な一般化は避けたいと思います。が、「冬」に対する恐れがないというのは驚きでした。この友人は、現在オーストリアのウィーンに住んでいます。ウィーンは雪が多いのかどうかまで知りません



寺泊では町全体で見ると10ヶ所位で賽の神（ドンド焼き）の行事が行われる。松かざり、古いお札などが燃やされ、その火でスルメ等を焼いて無病息災を願う。（吉地区）



俺達の地域のものが一番立派と自慢するのは京ヶ入のドンド焼き。孟宗竹を何十本も組み込んだとあってボンボンと火勢があがる中で竹が爆ぜる。（京ヶ入地区）



さんざん漁師衆を悩ませた越前クラゲが浜に沢山打上げられる。食用にもなるの話であるが、見捨てられたまいつか砂に埋れてゆく運命。

が、随分寒いところだと聞いています。越後の冬の寒さと雪は、四季にメリハリを与えます。だから、雪のないお正月は物足りません。「寒さと雪」に耐えて、ようやく春を迎える資格を得るということですから。そうでなかったら、春は嬉しくありません。「闘う」「耐える」という心の構えが出来上がるのは、豪雪に遭遇した体験からです。襖や障子戸が開かず、屋根の雪下ろしをした三々豪雪。中学二年の時でした。現在のように除雪車の体制がありません。当時、唯一スクールバスがあった野積の生徒は、バス運行がかなわず、町うちのお寺にしばらく寄宿しました。

した。同期生、野積荒谷の吉井進君は、磯町の親戚に泊めてもらったと証言しています。北魚堀之内町に住んでいた時の五六豪雪。「雪下ろし」とは言わず、「雪掘り」と呼ぶ地域です。つまり、雪に埋もれた家を「掘って」取り出すというイメージです。除雪車の体制は整っていませんが、とても間に合っていないほどの大雪でした。流雪溝は詰まって機能しません。仕事を終わった夜中、屋根の雪掘りをしたのですが、とても危険な作業でした。雪捨てのルーも捉も知らなかったため、お隣に迷惑をかけ、嫌味を言われました。

掘っても掘っても、また翌朝になると掘った分だけ積もっているのですから、生半可でありません。身体が極度に疲労し、目が血走ってきます。そのうち、雪捨て場に困って隣近所で「いさかい」が始まります。その「いさかい」の現場を何度か目にしました。しかし、雪は必ず融けます。融けない雪などありません。雪は消えてしまえばまさに幻、あの騒動は一体何だったのか、という事にもなりません。春先になると何事もなかったかのように、隣近所和解するのです。大雪になると寺泊の町の中は、両側の家並みに雪が積み上げられ、通りが狭くなります。除雪

の体制のなかった時代はなおのこと狭くなったものです。雪のしんしんと降り積もる底冷えのする夜、闇を突いて太鼓の音が近付いてきます。外をうかがうと、法華宗の寒行のご一行です。狭い雪道を、滑らないよう雪を蹴込みながら、整然と列をなして一心不乱に太鼓を叩く姿が、薄暗い外灯の雪中に浮かび上がります。すっかり汗をかいたガラス戸を指で拭き拭き、太鼓の音が闇に吸い込まれていくのを見送ったものでした。大雪の底冷えのする夜こそ法華宗の寒行に似つかわしく、行者に対する畏敬の念を禁じ得なかった記憶があります。寒行の太鼓はこの時節のなつかしい音です。

誌代御後援(敬称略・順不同)	
埼玉県 伊藤 幹俊	金三千元
さいたま市 松永 達一	金五千元
藤沢市 向田 美和	金三千元
三鷹市 佐藤 宇枝	金五千元
清水市 与作 友枝	金五千元
静岡市 藤田 澄枝	金三千元
高野 貞夫	金五千元
小金井市 眞子	金五千元
東京都 竹内 龍子	金三千元
阿部 正行	金三千元
坂戸市 阿部 正行	金三千元
朝霞市 藤田 傅治	金三千元
黒磯市 松尾 吉加	金三千元
新潟市 外山 スイ	金五千元
柳下 梅子	金五千元
渡部 政雄	金五千元
解良 敏雄	金三千元
稲葉 留造	金三千元
解良 留造	金三千元
藤田 九郎	金三千元

寺泊町	五十嵐屋	金五千円
古澤	うた	金三千円
山上	順治	金三千円
山崎	重雄	金三千円
小川	源治	金五千円
大塚	清	金三千円
小田野	豊子	金五千円
玉井	名	金三千円
匿	名	金一万円
匿	ハル	金三千円
蒲田	健一	金三千円
小形美代子	秀雄	金五千円
広川	久世美寿子	金三千円
小林	テル	金三千円
群馬県	田中	金三千円
銚子市	角原巳代野	金三十万
松戸市	五十嵐サト	金一万円
三谷市	願	金一万円
長岡市	浄願寺	金三万
吉田町	哲夫	金三万



荒れの合間をぬってのミズダコ漁。
20キロ級の大物になると床に吸い付くと仲々はぎ取るのに大格闘。

寺泊町	阿部忠勤	金三千円
渡辺昭吉	保平	金五千円
渡辺	保平	金五千円
渡辺牛乳店	実	金三千円
本田	義孝	金五千円
平石	文雄	金三千円
大塚	三治	金三千円
清水	三治	金三千円
茂木	三治	金三千円
住吉	晴夫	金三千円
大越	晴夫	金三千円
本合電化	敬	金三千円
橋本	敬	金三千円
解良	謙二	金五千円
觀光センター	謙二	金五千円
田中	義一	金三千円
柳下	義一	金三千円
新鮮魚店		金三千円
高橋		金五千円
利郎		金三千円



観光センター入口の軒に吊り下げられている寒干しの塩引き。
寒さと風が大きく働いてくれる。

寺泊町	外山武男	金三千円
竹内	千代	金三千円
田村洋品店		金三千円
山沢	良平	金三千円
マスツネ		金五千円
てんや		金三千円
渡辺美隆		金三千円
小田野弘喜知		金五千円
当銀	二良	金三千円
川合勝之助		金三千円
赤神伝左エ門		金三千円
五十嵐金十郎		金三千円
白根	屋	金三千円
斎藤藤枝		金三千円
川合	静香	金三千円
佐野幸一郎		金三千円
小島平弥		金三千円
水戸公四郎		金三千円
あくや米店		金三千円
後藤新平		金三千円



寒さと風とお日さまの恵みは外にも沢山ある。
干し柿と干し葉もその中の一つ。
干し葉の味噌汁や雑炊は独特の風味。

あとがき

今年はずばらしく休んでいた元旦マラソンが復活して、それを歓迎するかのような晴天の元朝、二日の年始配りは生憎の雨となつたものの穏やかで暖かいお天気まわりで、せりやふきのとう等頂いたりして、ひよっとして雪に難勝することなしで済ませるのではないかなどと思いはじめた矢先強烈な風雪にさらされるはめとなつた。

町を離れた人が良く言われるのは「申訳ないけど、冬の荒浪逆巻く海がなつかしく大好きだ」と。「申訳ないけど」はその中でふるさとの人達がいかにかご苦労しているかをわづらふ

しているからこそそのひと言。あれこれと良いこと悪いことない混ぜにしてのふるさと寺泊の新年は兎にも角にも穏やかに明け案の定風雪に明け暮れする日を迎えております。今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
編集人 中村 興樹
発行人
発行所 新潟県寺泊町
ふるさとだより
郵便番号 九四〇-二五〇二
ダイヤル局番 〇二五八七五
電話 二〇二九番
振替番号 〇〇六二〇三三七四五
印刷所 吉野印刷株式会社